

舞台大好き！

—観劇から「学ぶ」女子学生たち—

西田隆政

(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科教授)

はじめに

今の女子大学生の趣味の一つに舞台観劇があげられるようになってきた。もちろん、彼女たちは、学生らしく、大学生活の充実のために、サークル活動やアルバイトもしている。そんな中でも、学生生活の一つの柱のような存在として、舞台の観劇を位置付けている学生たちがいる。

本稿では、そのような大学生の一例として、甲南女子大学文学部日本語日本文化学科の2年生の4名の学生を取材して、彼女たちの大学生活とそこに占める舞台観劇の位置づけを取材してみた。彼女たちは、学科内でも交友があり、ともに舞台好きとして共感するものがある。学生生活の中で、どのようにして舞台の観劇をし、その中でどのようなことを考えているのか、手探りではあるものの、見ていくことにしたい。

なお、本稿で取り上げる舞台は、現在の女子学生の好みを反映して、いわゆる2.5次元作品¹や『宝塚歌劇』、また、その他の商業演劇が中心である。学生によるサークル等の演劇や小劇場物の作品等は、主要な対象としていないことを付言しておく。インタビューは、2017年12月22日14時30分より、稿者の研究室にて実施した。

1 自己紹介

まずは、4名の学生たちに自己紹介をしてもらった。以下、インタビュー形式で、話を進めていく。

司会西田（以下「司」）：それでは、順に自己紹介をニックネームでお願いします。よく見ている舞台とそれ以外でも力を入れている趣味があれば教えてください。

しおん（以下「し」）：しおんです。見るのは2・5次元で、主にゲームの『刀剣乱舞』²関係の舞台です。

本屋に行くのも好きで、学芸員の資格も取っているので博物館や美術館にも行きます。

はる（以下「は」）：はるです。気になっているのをチェックして見に行きます。『トランプ』³が好きですね。今は浅く広く見えています。

ちるちる（以下「ち」）：ちるちるです。私は、とにかく『宝塚歌劇』の星組です。他には、2.5次元も行きます。好きなジャンルの作品とコラボレーション（略称コラボ）したものは行きます。スマホゲームもします。

千鳥（以下「千」）：千鳥です。私も、もともとは『宝塚歌劇』からでした。ただ、最良の人がやめてから醒めて、外部⁴も見に行くようになりました。2.5次元は、自分の好みのものを選んで観劇しています。

¹ 今話題のマンガやアニメを舞台化した作品を指す。『ユリイカ』47-5（2015年3月）、『美術手帳』1038（2016年7月）に特集号があり、今の状況の理解の参考となる。

² 略称『刀らぶ』。DMM.com提供のPC版ブラウザゲーム。2015年1月運営開始。歴史上の名刀が男性キャラクターに擬人化して、それをゲーマーが指揮して戦うゲーム。

³ 2009年大阪で初演。末松健一演出。吸血種の少年たちの物語。詳細は<http://napposunited.com/trump/>を参照。

⁴ 外部出演のこと。『宝塚歌劇』の劇団員がそれ以外の舞台に出演すること。

司：皆さんありがとうございます。観劇に行く舞台は、皆さん、それぞれですね。やはり、地元でもあって、『宝塚歌劇』の好きな人がこの大学には多いですね。しおんさん、はるさんも、見に行かれますか。
二人：はい。大学の『宝塚歌劇講座』⁵の授業もあるので、宝塚大劇場には行きました。
司：これから詳しくお話を伺っていきますが、皆さんの舞台の趣味は、少しずつ重なりつつも、ずれていくところもあって、面白いお話になりそうです。これから楽しみです。

予想された通り、4名の女子学生の皆さんは、それぞれの興味に応じて、舞台の観劇に出かけている。今は学生たちの趣味も多様化して、舞台といっても幅が広く、話題の2.5次元でも非常に作品の種類が多くなり、特定の作品に集中するといった様子ではない。地元だけに『宝塚歌劇』のファンは、彼女たち以外にも日文学科には多い。

今回参加した4名は、ごく普通の学生である。授業にも真面目に出席して、資格などの勉強もしている。ただ、今の時代趣味が多様化して、数多くの楽しみがある中で、なぜ、特に舞台観劇を楽しみとするようになっていったのか、非常に興味のあるところである。

2 舞台にはまったきっかけ

前章での話を踏まえて、各人がどういうきっかけで、舞台観劇にはまるようになっていったのかを、語ってもらった。

司：皆さん、今大学2年生で、比較的時間の余裕も出来て、舞台観劇を趣味にしているのかと思います。ただ、やはりどんなものにもきっかけがあったはず。それについて、簡単に語ってください。

し：四国在住でしたが、大学入学して、神戸に来たのが大きいですね。最初、『刀らぶ』の舞台のDVDを見てこんなに楽しいものがあるのかと思いました。そして、自分の先輩の出ている演劇の舞台を見て、生の演技を見ることの面白さを実感しました。1年生のときは、もっぱらDVDを見ていて、実際に舞台を見に行くようになったのは2年生からです。

は：私は昔から『ハロプロ』⁶が好きで、『ハロプロ』のミュージカル『ステーシーズ』⁷の脚本が末光健一さんで、そのつながりで『リリウム』⁸が来て、舞台の世界に入っていました。私もDVDからで、生で見るのは神戸にきてからです。

司：お二人とも四国の出身でしたね。地方にいと、舞台観劇は大変ですね。

は：簡単には行けません(キリッ)。ライブビューイング⁹も四国はめったに来ないのです。交通費も高いし。梅田までこのあたりから200円台なんて、地方ではありえません!!(心の叫び)

司：(スルーして)お二人は大学進学で、こちらに来たのが大きなきっかけなわけですね。一方、ちるちるさんと千鳥さんは、神戸在住ですね。

⁵ 甲南女子大学文学部日本語日文学科で2008年度から開講されている講義。本年度で10周年を迎え、この講義から『宝塚歌劇』に目覚めた学生も多数いる。

⁶ 『HELLO!PROJECT』の略称。女性アイドルグループが多数所属する。詳細は<http://www.helloproject.com/>を参照。

⁷ 『ステーシーズ少女再殺歌劇』。大槻ケンヂ原作のホラー小説『ステーシーズ』を舞台化したもの。2012年6月、モーニング娘。等『ハロプロ』関係の女性アイドルが出演した。

⁸ 2014年6月末松健一の演出で公演。出演者全員女性で、モーニング娘。等『ハロプロ』関係の女性アイドルが出演。吸血種の少女たちが療養するサナトリウムで物語が展開する。

⁹ スポーツやコンサート、演劇などの各種イベントを、その行われている会場からライブ映像を全国各地の上映会場に中継してイベントを同時に楽しんでもらう企画のこと。今では、数多くの演劇で実施され、人気を博している。

ち：母が『宝塚歌劇』ファンで、中学2年生のころが『ベルばら』¹⁰ブームで、観劇するようになって今に至っています。真矢みきさん¹¹のファンでした。私自身は、子どものころファンでもなくて、『宝塚歌劇』は姫路市にあるの（全員：えー）みたいな適当な感じでした。母が霧矢大夢¹²さんの『スカーレットピンパーネル』¹³のDVDを買って、家に置いてあったのを、弟と見て、中一のときですね。そこから一気に目覚めました。弟と一緒に劇ごっこをしていました。

司：これもまたすごいですね。よくある、お母さんに連れられて宝塚大劇場のパターンじゃないんですね。千鳥さんもお母さんですか。

千：いえ、私は父の影響です（キリッ）。大地真央さん¹⁴と天海祐希さん¹⁵のファンでした。

全員：はあ（これまた王道やなあ）。

千：母はそんなにファンではありません。小学校4年生のときに初めて大劇場に行きました。水夏希さん¹⁶の雪組トップのときで、ショーの時に客席降りがあって、テンションが上がりました。私は雪組と宙組中心に見ていました。龍真咲さん¹⁷のファンになったのですが、昨年退団されてから、『宝塚歌劇』には少し醒めた感じですよ。

司：皆さん、それぞれ、人に歴史ありを実感します。地方と神戸とでは、また違うし、親御さんの影響も大きいですね。でも、今様々な舞台を楽しんでいるというのは、同じで、こうやって集まって話ができるというのも、ご縁を感じます。

きっかけは、人それぞれで、地方と都市部とでは、環境自体が違っている。そして、家族に劇場に行く人がいるのかどうかも、大きな要素というのがわかる。しかし、それ以上に重要なのは、彼女たちが大学生になってある程度時間的にも経済的にも余裕ができたときに、それをどの楽しみに使うのか、という点にある。

大学生は、高校生と比較して、自分の世界が一気に広がっていく。そのときに、何に自分のリソースを使用して楽しみを見つけていくのかが、大学生活の醍醐味である。ただ、ここまでの話を聞いてきても、彼女たちは特に無理をしている雰囲気でもない。自然と自分自身の世界を広げてきている、という感じであらうか。次は、今、特に自分がおすすめの舞台について語ってもらった。

3 おすすめの舞台

舞台とは、まさに旬を楽しむものであろう。とすると、必然的に今一番はまっている、ぜひともほかの人にも見てほしい舞台があるはずである。それについて、語ってもらった。

司：では、今他の人に見てほしい、おすすめの舞台があれば、語ってください。自分自身がはまっている

¹⁰ 言わずと知れた『ベルサイユのばら』1974年初演。以下『宝塚歌劇』関係の注は春原（2017）を参照して記している。

¹¹ 1981年入団。67期生。1995年花組トップスター。

¹² きりやひろむ。1994年主席入団。80期生。2009年月組トップスター。

¹³ 1997年ブロードウェイ初演のミュージカル。2008年星組安蘭けい主演で初演。2010年月組霧矢主演で再演。2017年星組紅ゆずる主演で再再演。

¹⁴ 1973年入団。53期生。1982年に月組トップスター。娘役は黒木瞳。

¹⁵ 1987年主席入団。73期生。1993年異例の若さで月組トップスターに抜擢。

¹⁶ 1993年入団。79期生。2006年雪組トップスター。

¹⁷ 2001年入団。87期生。2012年月組トップスター。

という感じでもよいですよ。

し：私の場合、やはり、『刀らぶ』関連の舞台です。『刀らぶ』には、「ステージ」¹⁸と「ミュージカル」¹⁹があって、ともに魅力的です。もともとゲームの世界ですから、特にストーリーとかもありません。また、登場する刀のキャラクターである刀剣男子も動きや表情はゲーム内ではありません。それが、実際舞台の上で動いているのです。そこにまず感動します。舞台に「本丸」²⁰があるのも嬉しいです。私たちも「審神者」(さにわ)²¹としてゲームをしているのですが、ゲームの世界観が生きていて、入って行きやすいのです。

司：気合が入ってきましたね。

し：でも本当はゲームの『刀らぶ』はしんどいんです。私は育成が苦手で、育てる刀たくさんいるし、なかなか育たないし、嫌になるときも。そこに、アニメや舞台やいろいろあって、キャラクターの存在が実感できて何とかやっています。

は：私も育成系のゲームは苦手です。スマートホンで画面をタッチするだけでは飽きてしまいます。メディアの広がり、いろいろとあるので、頑張れます。

司：うーん、だんだん大変な話になってきましたね(なんだかなあ)。はるさん、お願いします。

は：私は「推し」を出します。ハロプロにいた田村芽実(めいみ)さん²²の舞台です。卒業してから『リリウム』のキーパーソン演じています。とにかく、歌がうまくて、今はいろいろな舞台で活躍しています。

司：ハロプロから来ましたね。ちるちるさんは、皆さんよく知っていますが(汗)。

ち：『宝塚歌劇』星組トップの紅ゆずるさん²³です。デビュー当時からファンで、特に宝塚バウホール²⁴公演の初主演で、『メイちゃんの執事』²⁵をしたときの登場セリフ、「私の命に代えてお守りします」に感動してはまりました。「一生ついていきます」という気持ちです。ただ、「会」(ファンクラブ)には入っていません。

全員：えー！(なんでやねん)

ち：母も入ってなかったんです。入ってしまうと、その人しか応援できない雰囲気になってしまって。私は『宝塚歌劇』全体のファンでいたくて、いろいろな組の舞台も見て応援したいんです。

司：この気持ちはわかります。「会」も本気になると大変な世界だそうですから(冷や汗)。

ち：もう一つ、ありまして。これは今日ぜひ皆さんにお伝えしたいんです。『スタミュ』²⁶が大好きです！！

全員：えっ！？(こっちにきたか)

ち：高校生のときにアニメを見て、はまりました。毎週月曜日に放送があって、イベントにも行きました。オリジナルアニメで展開のわからないのも魅力で、ミュージカルアニメなので、アニメ放映後毎週水

¹⁸ 舞台『刀剣乱舞』2016年5月より「虚電 燃ゆる本能寺」初演。

¹⁹ ミュージカル『刀剣乱舞』2015年12月トライアル公演。2016年5月「阿津賀志山異聞」初演。

²⁰ ゲーム上で刀剣男子たちが出陣に備えて控えていると設定される場所。プレイヤーごとにあるとされる。

²¹ ゲームでのプレイヤーの名称。歴史改変を試みる者を刀剣男子たちを率いて阻止する役割があるとされる。

²² 『ハロプロ』のメンバー。『アンジュルム』(旧：スマイレージ)を2016年5月卒業。

²³ 2002年入団。88期生。2016年星組トップスター。

²⁴ 宝塚大劇場内に併設されている小劇場。席数が少なくチケットを取るのが大変なことが多い。

²⁵ 2011年1月星組の選抜メンバーで公演。原作は宮城理子による少女マンガ。2006年より『マーガレット』(集英社)連載。

²⁶ 2015年10月よりアニメ放映が開始された。監督多田俊介、制作C-station。学園ミュージカルもので、主人公たちがライバルと競い合いながら成長する物語。<http://hstar-mu.com/1/>を参照。

曜日には CD が発売されて、12 週連続でした。全部買いました。今年の春には舞台化²⁷しました。

司：これまた、すごいですね。『宝塚歌劇』は聞いてましたが。

ち：ただ、『宝塚歌劇』の要素もあるんです。主人公のグループが 5 人組なのですが、この全員に花・月・星・雪・空（宙）の組²⁸の漢字が名前に入っていて、宝塚を意識していて、今年やった二期のエンドカードでは、羽根を背負った姿²⁹も描いてあります。2.5 次元舞台になりますが、他のとは違って、ミュージカルを全面に出して、歌やダンスをメインにしています。舞台好きにも絶対に受ける作品です。応援よろしくお願いします。これのファンクラブには入ってます。舞台のチケット取らないといけないので（テヘペロ）。

司：しっかりしてますねえ（なんだかなあ）。では、千鳥さん、お願いします。

千：舞台熱は落ち着いてますね。加藤和樹さん³⁰の舞台は見に行きますが、無理してまでは行きません。おすすめは『セラミュ』³¹です。原作に忠実にやっているの、アニメファンの人でも十分に楽しめますよ。

司：これは私も一度観劇しました。最後の最後に主題歌が観客も一緒に歌えて感激ものでした。タキシード仮面様³²がちよっと目立ちすぎとも思いましたが。マントさばきは、さすが大和悠河さん³³です。それはさておき、皆さんのおすすめは、どれも面白そうです。勉強になりました。

4 人とも舞台が好きと自認するだけあって、いずれも今、旬の作品ばかりである。予想されたとはいえ、これも、全員考え方が異なっている。基本的に何か好きな世界があって、そこから芋づる式に広がっているという感じである。もともと、舞台そのものへの興味がなくても、自分の最上のタレントや好きなゲームが舞台に関連していくと、自然とそちらにも目が向くというものである。

ただ、中で、面白いのは、ゲームに力を入れている学生とは感覚が違う点である。西田（2017）で触れたように、彼女たちはゲーム内のキャラクターを地道に育てるのに、何よりも喜びを感じるとしていた。しかし、舞台に興味を持つ学生は、育てるのは面倒に思えることがある、と言う。このあたりは、広い意味でのマニア系ともいえる趣味を楽しみにしている層でも好みに違いがあるということがわかる。

4 人の学生たちは、全員はまっている舞台は異なっている。しかし、舞台のような、いわゆるライブとして楽しむものに足を運んで見に行く、それに価値を感じる点では、同じ方向性を持っているということになる。そして、わざわざ、お金と手間と時間をかけて、舞台に行くというのは、やはり、舞台上に自分の「推し」ともいえる存在がいることが大きなモチベーションになるだろう。この点をさらに探っていく。

4 推しの存在

この章では、舞台を観劇する上で、重要なモチベーションとなる「推し」の存在について、考えていく。ゲームの場合も、登場するキャラクターが自分の好みで「推し」たくなるかどうか、大きなポイントで

²⁷ 2017 年 4 月初演。アニメをベースにしたストーリー展開である。

²⁸ 宝塚歌劇の 5 つの組の名称。この順番で設立された。

²⁹ ショーのフィナーレでは男役トップスターが巨大な羽根を背負って大階段を降りてくる。羽根の重さは 15 kg 以上ある。モノによっては 20 kg を超えるものもあるとか。

³⁰ 2005 年ミュージカル『テニスの王子様』（略称『テニミュ』）出演、現在舞台俳優として活躍中。
<http://www.katokazuki.com/>を参照。

³¹ 『美少女戦士セーラームーン』のミュージカル。1993 年 8 月からバンダイにより舞台化される。現在は、2013 年よりダウンゴ・ネルケプランニングにより上演されている。

³² 言わずと知れたセーラー戦士を守る地球の王子様。主人公月野うさぎの運命の恋の相手。

³³ 1995 年入団。81 期生。2007 年宙組トップスター。退団後、『セラミュ』でタキシード仮面を演じる。

あった。これは、ゲームのように気軽には始められない、舞台観劇をする上では、とりわけ重要と考えられる。

司：先ほども「推し」については、何人かから話が出ていましたが、ここではそれについて、さらに踏み込んだ話を伺いたいと思います。しおんさんは、やはり、『刀らぶ』のキャラクターですか。

し：私の「推し」は「山姥切国広」³⁴です。ゲームの「推し」キャラが舞台上で動いている！と感動モノでした。また「薬研藤四郎」³⁵も再現度が素晴らしく惹かれました。次に、中の人にも興味が出てきて、「山姥切国広」役の荒巻慶彦さん³⁶にも注目しています。でも、実際舞台を見に行くと、みんな好きになります。動くときまたゲーム内のキャラとは違う魅力を感じます。結局、作品ごと推していますね。

司：そういう感覚ですね。でも、中の人という言い方がキャラクターから来た人らしいですね。

し：「ミュージカル」の方はキャラクターと距離が近くて、楽しんでみる感じです。「ステージ」の方は中で物語進行しているので、キャラクターたちが本丸で日常を楽しんでいる様子が楽しいですね。あ、そうそう、役者さんをついキャラクターの名前で呼んでしまいます。

千：舞台に来てる人でも、中の人目当てで来ている人には、どう感じますか。私は、役者さん好きの人にも作品のことは勉強してほしい方です。

し：特に気にしませんね。みんな、それぞれ楽しめばいいので。舞台が始まったら全員盛り上がりますから。

司：この話は、微妙なところですね。はるさんは、どうですか。

は：田村さんが卒業後の主演で本田美奈子さんの舞台³⁷をしました。これから、そういう本格的な方向に進むようですね。でも、私はアイドル時代からの意識もあって、盲目的なところもあります。とにかく、批評もしない、何をやっても許せる。活躍は嬉しいけど、複雑な気持ちもあります。成長は嬉しい、でも新しくできたファンとの関係があると、アイドル時代が黒歴史みたいなものになると嫌ですね。

司：昔からのファンならでは悩みですね。ちるちるさんの紅さんは、まさに今トップスターですが。

ち：でも、トップになるというのは、次は劇団を退団するしかないんです。だから、二番手時代が楽しかったです。いろいろな人に自由に絡んでいけましたから。トップのお披露目は嬉しいけど、やはり責任の重さや背負っているものの大きさからか、お茶会³⁸の雰囲気も変わった気がします。

は：アイドルファンも、引退は怖かったですよ。18歳の大学進学とか、25歳あたりになると、びくびくしていました。

司：舞台やライブは生身の人間がやることですから、引退がついて回りますね。実際に引退した、千鳥さんはいかがですか。

千：今は特にいないと思っています。皆さんの話を聞いて、「推し」とは何なんだろうと考えていました。一生ファンでいることもできないだろうし。「推し」の人も、『宝塚歌劇』にいたころとは違うのを実感します。やはり卒業してしまうと、距離を感じます。

³⁴ 堀川国広作の太刀。安土桃山時代の刀剣。重要文化財指定。ゲーム内では白装束、ネガティブなところもある。

³⁵ 栗田口義光作の短刀。鎌倉時代中期の刀剣。ゲーム内では少年姿だが男らしい強気な性格。

³⁶ 2012年『テニミュ』で注目される。現在舞台上で活躍中。https://twitter.com/ara_mackeyを参照。

³⁷ 『minako - 太陽になった歌姫』。2005年38歳で亡くなった生涯を舞台化。2017年5月初演。田村が本田美奈子役を務める。

³⁸ 「会」の主催する、「宝ジェンヌ」（『宝塚歌劇』では生徒とも）を囲んだファンの集い。人気のスターだと1000人単位の時もある。

司：「推し」は大切な存在ですが、デリケートなところがありますね。単純に応援しているというふうなものではないのが、よくわかりました。

「推し」がいるから舞台に行く、これが基本的なところであるのはわかる。しかし、「推し」の存在は単なるプラスの側面だけでなく、その存在への心配さからネガティブな感情も抱いてしまうもののようなのである。生身の人間である以上、ある分野等からの引退や、あるいは新たな世界へ旅立っていくこともある。それに自分がついて行けるのかという不安もあろう。

西田（2017）で検討した、ゲームのファンたちとは、かなり感覚の違うのがわかる。ゲーム内のキャラクターはその中だけでの存在なので、今の自分とキャラクターの関係だけを考えていればよい。しかし、舞台に立つのは生身の人間である。彼らは、これからも一人の人間として生きていく、そして、変わっていく。それを「推し」としている自分たちがこれからも同じ気持ちでいられるのか、悩み多き問題である。

5 お金の問題

舞台を観劇するためには、まずは、先立つものとして、お金が必要である。チケットは決して安いものではなく、映画のように 2000 円以内ということはありません。また、人気の舞台では、チケット入手が非常に困難であるのはいうまでもない。ここでは、観劇上の最大のネックである、この問題を尋ねてみた。

司：さて、ここからは、舞台を観劇する上で避けては通れない、お金の問題を考えていきます。もちろん、入手の困難さやスケジュールを合わせることも大変さもあります。このあたりから、お願いします。

し：経済的には、何とか回してます。下宿生なので無理はしません。遠征までは基本しません。見たいものが関西にきて、都合がつけばチケットに応募するという感じです。自分では堅実なつもりです。ただ、DVD は欲しいので買います。

は：私も遠征はしません。一度だけ、上演するところにアルバイトすることにして、行ったことはありますが。関西に来たから、基本日帰りで行けるのが一番嬉しい。無茶しません、生活第一だから。

し：よっぽど行きたかったら、何とかして行こうとはしますね。

は：大学生だから平日の昼間がねらい目です（キッパリ）！ 今だけですから。

司：教師の立場上、あまり肯定できませんが（汗）、皆さんが計画的なのはよくわかりました。

ち：正直「扶養の壁」³⁹を意識しています。アルバイト先とも相談してシフト組んでもらいます。

全員：えー！（本気やとこうなるなんや）

ち：今年は、50 回以上観劇しました。まだ、『宝塚歌劇』は母親とも行くので、多少の援助はありますが。紅さんの東京公演には行くし、それにグッズが大好きで、写真も買いたい。2.5 次元のプロマイドなんかメンバーコンプリートして揃えたくもなります。

司：これは大変ですね。実家住まいではあるものの、生活即観劇ですね。ほぼ毎週ですから。

千：私もチケットが取れたら、どこでも行きます。グッズも 2.5 次元で『うた☆プリ』⁴⁰は集めました。痛バック⁴¹も作りましたよ。私は「推し」のだけ集めたいので、集中してやります。人を応援するときもピンポイントです。アルバイトはお金も大事なのですが、それ以上に自由の利くところを選びま

³⁹ これ以上の収入を得ると扶養家族から離れて個人で健康保険や国民年金をしはらわなくてはならなくなる、その収入の上限を指す。

⁴⁰ 『うたの☆プリンスさまっ♪』。2010 年に音楽ゲームとしてブロッコリーより発売。2011 年よりアニメ化、2017 年 6 月に舞台初演。

⁴¹ 推しの缶バッジや様々なグッズで装飾したバックのこと。http://kai-you.net/article/39682 の画像を参照。

す。お金に追われてはダメ、健康じゃないと舞台も楽しめません（キッパリ）！

司：至言ですねえ（感動）。やはり、生活が不安定だと、舞台にも集中できませんから。皆さん、それぞれに自分のスタイルを持っているのがよくわかります。グッズや DVD 等は集めだすとキリがありませんから、このあたりも、考えていくしかありませんね。

学生である以上、学業が優先であり、使えるお金にも限界がある。しかし、舞台は見たい。当然、アルバイトをすることにはなるが、そこばかりになると本末転倒になる。ここにいる 4 人は、自分のスタイルを作って、学業と舞台観劇とアルバイトのバランスをとっていると思われる。舞台のチケットだけでなく、付随して、グッズや映像の DVD は、当然ほしくなるものである。しかし、これもまた、お金のかかるものであり、自分でルールを作って揃えるしかない。各人、生活に支障が出ないようにコントロールしているようである。

彼女たちは、全員卒業が危ぶまれるような学生ではなく、授業にもしっかりと出席して単位も着実に取得している。今は 2 年生であるが、これから 3 年生になってもそのスタイルで学生生活を楽しみ、舞台を観劇すると予想される。

6 これからの自分と舞台の関係は

最後に、舞台の観劇を自分がこれからどのように楽しんでいくのか、また、今後舞台の上演等で希望することについて聞いてみた。

司：皆さんの話を聞いていると、舞台を観劇するのは、楽しいことばかりではなく、それなりの苦勞が伴い、それをクリアするための努力も不可欠なのがよくわかりました。最後に、自分自身にとっての、これからの舞台観劇をどう楽しむのかということ伺いたと思います。

し：これからもっと見に行きます。2.5 次元は見たい俳優さんが他の「作品」にも出演するので、いろいろな舞台が見たいです。ライブビューイングも行きます。ゆったりと見られるのがいいですね。

は：私ももっと見ます。チケットを取る気合も入って、芋づる式で広がりそうな感じです。私はライブビューイングに不満もあります。DVD 見るのと同じで、特定のシーンしか見られません。好きな俳優さんだけ追いかけてみたいので、舞台なら隅々までオペラグラス等で見られます。そこもまた魅力です。

司：3 年生になると文系の場合時間割の組み方も自由になりますから、工夫次第でいろいろと見に行けますね。ライブビューイングは、私も行ったことがあります。近場でかつゆったり見られるのは嬉しいですね。ただ、カメラに視点が制約されますから、その点は不満の出るのもわかります。

ち：2018 年、『宝塚歌劇』の星組は台湾公演⁴²があります。これは行くしかないなので、今から楽しみです。お金や時間のことを考えると大変です。もちろん、他の組も見に行きたいし、2.5 次元も行きます。『スタミュ』に出てた人が『刀らぶ』のミュージカルに出るそうなので、これも絶対に行きます。

し：一緒に行きましょう（笑）。私は『刀らぶ』の「ミュージカル」で二階席だったのですが、「推し」が近くまで舞台降りして来てくれた時は、「ヒュー」と声が出てしまいました（汗）。

司：「推し」への愛は偉大ですね。千鳥さんは、どうでしょうか。

千：舞台を見る見方を変えようと思っています。好きな公演を何回も見ようと思ったのですが、これからは、幅広く見たいですね。何回も見た公演よりも、たった一回しか見ていない公演が印象に残ることが今までもありました。特に子どものころ見た『宝塚歌劇』はそうでした。幅広く見るのをこれから

⁴² 2018 年 10 月 11 月に台湾の台北と高雄で公演予定。『Thunderbolt Fantasy 東離劍遊記』（虚淵玄脚本・小柳奈穂子脚本・演出）。

の自分のテーマにしていきます。

ち：私も今まで以上にいろいろな舞台を見たくなってきました。

司：皆さん意欲的です。これからの舞台観劇も楽しんでいけそうに思えます。ちるちるさんは、ご無理なさらないようにお願いしますよ。それはともかく、長い時間にわたって、皆さんには取材に協力していただきましてありがとうございます。皆さんの今後の舞台観劇が充実したものになることをお祈りして、このインタビューを終えます。

全員：皆さん、お疲れさまでした（拍手パチパチパチパチ）。

各人、おかれた状況は違うものの、舞台の観劇をこれからも積極的にしていこうというのはよく伝わってくる。ただ、各人の生活している状況や好きな舞台は明らかに違っているので、一概にこれからどうなるといえるものではない。しかし、基本的には、今まで以上に考えて舞台を見ようとしているのは明らかである。好きで始めた舞台観劇ではあるが、これからは自分自身がより楽しむためにも、もっと考えて見る舞台を選び、どのように興味を広げるのかも課題となっているようである。

舞台の観劇は、先にも述べたように、お金と時間がないと楽しめない。学生は、時間はまだ作れるものの、お金を稼ぐことに力を入れてしまうと、学生生活そのものが危うくなり、本末転倒である。彼女たちは、その点も十分に考慮した上で、学生生活の重要なアクセントとして舞台観劇を位置づけているといえるだろう。

7 女子学生と舞台観劇

ここまで、4人の女子学生に、自分自身と舞台観劇の関りについて、インタビューの形で取材を行った。その結果として、特に、各人に共通することとして、次の5点の注意すべきことが見出だされたと考えている。

- ① 何かのきっかけがあって、自然に舞台を観劇するようになっていったこと
- ② 生の舞台の良さを知ると自然とはまってしまうものであること
- ③ 「推し」は好きで大切なものだが、いろいろと悩みは尽きないものであること
- ④ お金は何とかして、舞台観劇は楽しみではあるものの無理はしていないこと
- ⑤ これからはより視野を広げて舞台観劇を楽しみたいと考えていること

まず、ゲームやアニメとは違って、舞台観劇という楽しみは、それなりのハードルがある。①のように、何らかのきっかけがあって、最初の観劇という壁をクリアすると、一気にその世界に入っていくという感じである。また、②のように、生で俳優さんが演じていることの面白さ楽しさを知ってしまうと、どんどんその世界にはまっていく。これは、その人の個性にもよるが、大学生の時点で、舞台観劇を楽しんでいる層は、その楽しさを知ってしまっ、もう後戻りできない人が多いと思われる。

舞台観劇する際の、もっとも魅力的な要素として、「推し」の存在がある。しかし、③のように、それは舞台で観劇出来て嬉しい、というような単純なものではなく、「推し」であるからこそ、心配という要素も数多いのである。特に、『宝塚歌劇』ではいずれ退団することが決まってお、その他の舞台でも役の交代や違う世界へと轉身するのは、よくあることである。そして、それは確かにつらいことではあるものの、それがあからこそ楽しめるということもあろう。まさに、舞台は今の「華」を楽しむものであり、「推し」と今を共有することこそが舞台の醍醐味ともいえるだろう。

舞台を実際に観劇するためには、先立つものとしてのお金が不可欠である。④のように、4人の学生は、

それぞれの生活状況に合わせて、工夫しているようである。しかし、他の趣味以上に、舞台観劇はお金がかかる。チケットは高価であり、東京他遠征するとなると交通費や宿泊費もかかってくる。このあたりが、舞台観劇の一番の課題で、社会人でも舞台観劇をするために稼いでいるとでもいうべき人は多数存在するとのことである⁴³。

学生らしく今後の課題ということであるが、⑤のように、視野を広げて幅広く見たいという気持ちを各人が持っているのは、非常に頼もしいことである。そのためにも、学生時代の仲間は重要であろう。情報交換をすることで、今まで知らなかった世界を知ることができて、さらに新たな舞台の楽しみ方を知ることにもつながってくる。これは、大学生活での「学び」の一つとも位置付けられるのではなかろうか。

当初は、大学生が舞台の観劇を趣味とするのは、かなり無理をしているのではないかと、という印象もあったのだが、それは杞憂であることがわかってきた。単に好きだから見に行っているというのではない。彼女たちは、舞台を見ることで自分の生活を考え、自分の「学び」となっていることを自覚しつつあるのである。

おわりに

今回の取材からの考察では、主に、彼女たちが学生生活を送る中で、どのようにバランスをとって舞台の観劇を楽しんでいるかを、検討するというところに絞って考えてみた。舞台観劇するのは、何となく好きだからするというようなものではなく、お金や時間のことも十分に考えて楽しんでいることがわかってきた。

そして、舞台の観劇は、そのお金や時間をかけただけの楽しみを得られるものである。西田シャトナー(2015)は、『テニミュ』が始まってから10年以上が経過して、若い女性たちが舞台を観劇することは、ごく普通のことになりつつある、と指摘する。趣味の多様化がいわれる中で、しっかりとその地歩を固めたともいえるだろう。

現在の日本の舞台演劇の状況は、『テニミュ』をはじめとする2.5次元演劇の定着とともに、大きく変わりつつある。この問題については、他の関連する演劇やサブカルチャー分野との比較検討も不可欠で、幅広く考察することが求められる。今後の課題ということにしたい。

【参考文献】

『ユリイカ』47-5 総特集 2.5次元 2次元から立ち上がる新たなエンターテインメント(青土社2015年3月)

『美術手帳』1038 特集 2.5次元文化 キャラクターのいる場所(美術出版社2016年7月)

とうらぶ研究会編、2016、『アプリ完全攻略 Vol.11 とうらぶ2016 合戦絵巻』standards

西田シャトナー、2015、「コロスの響くロードレースー舞台『弱虫ペダル』に吹く風」『ユリイカ』47-5 はるな檸檬、2011、『ZUCCA×ZUCA』1、講談社、2014年8月全10巻で完結

春原弥生、2017、『宝塚語辞典』誠文堂新光社

西田隆政、2017、「大学生ゲーム女子ー生活とゲームとのバランスー」、『女子学研究』vol.7、女子学研究会

【参考サイト】

荒巻慶彦公式 Twitter https://twitter.com/ara_mackey

⁴³ 舞台好き女性の生活を描いたマンガ等の作品は多数ある。一例としては、宝塚歌劇にはまった女性たちの生活を描く、はるな檸檬のマンガ『ZUCCA×ZUCA』がある。

加藤和樹公式サイト <http://www.katokazuki.com/>

スタミュ公式サイト <http://hstar-mu.com/1/>

HELLO! PROJECT <http://www.helloproject.com/>

KAI-YOU 「痛バッグコンテスト」受賞作に目がくらむ 対象への愛が深すぎる 2017年3月24日
<http://kai-you.net/article/39682>

TRUMP 公式サイト <http://napposunited.com/trump/>

(いずれも最終確認は2018年1月9日)